

# 文法から読みとく文学作品のコンテキスト： ヘミングウェイとトウェインの短編より

中西 佳世子

## 1. はじめに

昨今の大学では文学部に代わり、国際やグローバルなどを冠した学部が創設されてきたが、それに伴って英米文学作品を読む授業は減ってきている。一方、共通教育科目の英語でも実用的な英語力が求められ、文学作品を教材に用いるのは難しいのが現状と言える。しかし、10年ほど前から英米文学研究者を中心として、英語教材としての文学作品の有用性を見直す議論が行われるようになってきた。アメリカ文学研究を専門とする筆者も、文学作品の持つ豊かな言語世界と英語教育との接点を模索してきた。本稿では、アーネスト・ヘミングウェイ(Ernest Hemingway)とマーク・トウェイン(Mark Twain)の短編を取り上げ、簡単な文法が作品のコンテキストに深く関わる例を紹介したい。

## 2. ヘミングウェイ「贈り物のカナリア」

「贈り物のカナリア」(“A Canary for One,” 1926)は自伝的要素を含んだヘミングウェイの短編で、作家自身の有名な「氷山の理論」一主題を熟知している作者は全てを書く必要はなく、物語のテキストは氷山の一角であり、その水面下に隠された省略部分を読者は深く感じることができ—が実践されている作品と言える。

「贈り物のカナリア」は文庫本で8頁ほどの小品だが完成度の高い作品である。ローマからパリに向かう列車のコンパートメントが舞台で、「3人称の語り手」による車窓の風景の描写から始まる物語は中年のアメリカ女性の客観的描写へと移行していくように思われる。ところが物語も半ばで語り手は突如「数分間ほど、ぼくはアメリカ人の婦人の話を聞いていなかった。彼女はぼくの妻に話しかけていた」(ヘミングウェイ 404)と述べ、語り手自身が妻と旅をしていること、同室の中年女性の耳がほとんど聞こえないことなどを明らかにする。そして物語

の最後で、この1人称の語り手であり、当事者である夫から、夫婦は離婚するためにパリに帰ってきたのだと読者は告げられる。

こうした事情がのみ込めると、のどかな郊外の風景、農家の火事、煙突が林立する工場、事故で大破した車両と変化していく車窓の描写が夫の心象風景でもあったこと、唇の動きで話を理解する聾の中年女性には自分が意識して見ていない事は起きていないも同然であり、彼女を観察する夫の視点から、彼女の自己中心的なふるまいと冗長なおしゃべりが伝えられること、そして妻と中年女性のちぐはぐな会話が、実は夫に聞かせるものであること、などが浮彫りになる。狭いコンパートメントでの気まずく、息詰まる夫婦の関係性が中年女性に冷ややかな目を向ける夫の視点を介して描かれているのだ。

さて、物語の概要をつかんだところで、本稿のテーマに入ろう。次の引用は、語り手が夫であることが判明する少し前、列車がアヴィニョンで一時停車しているときのプラットフォームの描写である。

プラットフォームには、黒人兵士の一団がいた。彼らは茶色の制服を着ていて、みな背が高く、顔が電灯の近くでテカテカ光っていた。①彼らの顔は見事に黒かったが、背が高すぎてまともに見てはられない。汽車は黒人たちを残してアヴィニョン駅を出発した。彼らのなかには、背の低い白人の軍曹が一人まじっていた。

②寝台車のコンパートメントでは、ポーターの手で三つのベッドが壁から引き出され、寝る準備ができていた。(中略)汽車は一晩中猛スピードで走りつづけ、アメリカ人の婦人はずっと眠らずに衝突を待ちかまえていた。

(ヘミングウェイ 402-403)(下線、傍点筆者)

ここでの描写は、当初、語り手が3人称であるかの印象を与えるのだが、下線①で読者は戸惑うことに

なる。この箇所の原文は次のようになっている。

Their faces were very black and they were too tall to stare.

(Hemingway 119) (下線筆者、以下同様) つまり、それまで全知の視点で描写しているように思えた語り手が、「黒人兵士の背が高すぎてその顔を見つめる(stare)ができなかった」と述べ、語り手自身が黒人兵士と同じプラットフォームに立って身長差を認めたことを示唆するのだ。語り手は3人称ではなかったのかという疑問が浮かんだ直後に下線②の表現がくる。これも原文をみてみよう。

Inside the lit salon compartment the porter had pulled down the three beds from inside the wall and prepared them for sleeping. (同上) 3人称の全知の語り手であれば、ポーターが寝台を準備したという過去形でも事足りる。ところが、過去完了形を用いることで、語り手がプラットフォームから戻ってくるとすでに寝台の準備が終わっていたという完了の状況が描かれる。しかし、登場人物を焦点人物として3人称の語り手に語らせる技法もあるのでまだ確信は持てない。①の too ~ to 構文、②の過去完了の文で、作家は動作や認識の主体を表す語句(for me, I found など)を省略し、語り手が登場人物だという読者の確信を先延ばしにしているのだ。

その後、語り手が妻と旅行中の夫であることが判明する。その認識を得てから先の引用箇所に戻ると「アメリカ人の婦人はずっと眠らずに衝突を待ちまわっていた」と述べる語り手の夫も一睡もしなかったことにはたと気づく。語り手の特定を引き延ばすことで、その気づきがより効果的になるのだ。

そうすると、夫がアヴィニオンでプラットフォームに降りた理由も推測できる。中年婦人はそれまでも一時停車の度に車外に出ており、アヴィニオンでも同様であったことが窺われる。寝台の準備に要する時間の経過から停車時間はそれなりの長さがあったことが分かるが、夫はコンパートメントに妻と二人きりになることを避けて車外に出たのではないか。そうした夫婦の関係性の破綻は、眠れぬ夜を過ごした夫が車窓に見る、事故で大破した車両の様子にも示唆されている。

下線①、②は高校1年レベルの英文法で簡単に読めるがゆえにそのレトリックを見逃しがちだが、逆に、その文法によるレトリックを知れば、随所にあ

る解釈のヒントに気づくことができると言える。

「ナラティブ」が時間の経過を描くものだとすると、例えば“My dog has fleas”は単なる叙述で“My dog was bitten by a flea”は短くても「ナラティブ」ということになる(Hawthorn 12)。下線①の too ~ to 構文、そして下線②の過去完了は、叙述的な描写の中に語り手が主体となる行為の時間的経過(背の高さを比べた、戻ると寝台が準備されていた)を導入しながら「ナラティブ」の主体を曖昧にすることで、語り手が登場人物であることを明かすまでのサスペンス効果を高め、物語のコンテキストを浮き彫りにする技法となっているのだ。

### 3. トウェイン「アオカケスの困ったこと」

『ハックルベリー・フィンの冒険』(*Adventures of Huckleberry Finn*, 1885)で有名なマーク・トウェインは「ほら話」(tall tale, yarn)をアメリカ文学特有のジャンルに高めたことでも知られている。ここではその「ほら話」のひとつ「アオカケスの困ったこと」(“Jim Baker's Blue-Jay Yarn,” 1880)の「文法」への言及をみていきたい。

「アオカケスの困ったこと」は、動物の言葉がわかるカリフォルニア鉱山のジムを紹介する語り手の話と、ジムが語るアオカケスの話という二重の枠物語になっている。そのジムは、アオカケスはどの動物よりも多様な感情と気分を有し、切り口上やメタファーが得意で、猫より正しい立派な文法を用い、文法を間違えば人間同様に恥じ入ると言う。

さて、この物語の外枠の語り手がまゆつばなのは「ほら話」の定石といえるが、この作品では内枠のアオカケスの話に加え、ジムの語り自体が「ほら話」の要素となっていることをみていきたい。

ジムは、「わたしはアオカケスが間違った文法を使うのを一度も聞いたことはありません」(トウェイン 32)と述べ、アオカケスが家の屋根の小さな穴にドングリを入れるエピソードを語り始める。

When I first began to understand jay language correctly, there was a little incident happened here. (わたしが初めて、カケス言葉なるものを正確に理解しはじめた頃、ここでちょっとした出来事が起きました。)(原文(Twain 10) 翻訳(トウェイン 33))

ここで彼の使う動詞は begun となっており文法を

間違っている。その後のジムの語りにも、彼が伝えるアオカケスの言葉にも文法の間違いが続出する。

さらに、穴が一杯にならずに途方にくれるアオカケスの様子をジムは次のように述べる。

He just had strength enough to crawl up on to the comb and lean his back agin chimbly, and then he collected his impressions and began to free his mind. (やっこさん、とさかのところまで這い上って行って、煙突にもたれるだけの力は残っていたようでした。それから気を取り戻してあのことを忘れ始めました。)(原文 (Twain 11) 翻訳(トウエイン 35))

ここでは *leaned* となるべきところが *lean*, また *against* が *agin*, *chimney* が *chimbly*, *began* が *begun* となっている。

こうしてジムの英語は語彙的にも文法的にも正確でない傾向が益々顕著になっていく。彼が正しい文法や語を使えないとすれば、アオカケスが正しい文法を使うとする彼の言も信憑性を失う。アオカケスのエピソード自体は典型的なユーモアに満ちた「ほら話」だが、なぜ文法の話が必要なのか。

十九世紀アメリカのリアリズム文学を代表するトウエイン作品の特徴は口語を用いた点にある。特に「ほら話」は本来が口承文芸であり、身振り手振りを交え、方言を用い、聞き手の反応を見ながら、自由に語るものであった。トウエインは「物語の語り方」(“How to Tell a Story”)というエッセイで、ユーモラスな話というものは話し方の効果に依拠すると述べている。それを書き言葉で記すことは「陸地で船を、川で馬車を使うようなもの」(Wonham 285)なのである。「アオカケスの困ったこと」の場合、例えば落語や漫談のような口承文芸を思い浮かべると、文法の正しさを強調する話し手が文法の間違いだらけというギャップそのものが笑いを誘う要素となることが理解できるだろう。本稿で用いた西崎訳は標準語に近い日本語だが、原文の可笑しさを翻訳で再現し、語りのギャップで日本の読者をクスリと笑わせるのは至難の業だろう。それは言語だけの問題ではなく、アメリカン・ユーモアの本質という文化的理解の問題に及ぶ。

#### 4. まとめ

極限まで切り詰めたヘミングウェイの簡潔な文

体・文法による表現は学生には取っ付きやすく感じるようだ。一方、その水面下にある「冰山」の部分の解釈を行うには、文法の知識、洞察力や作品背景の情報も必要となる。こうした意味で、ヘミングウェイ作品はさまざまなレベルの学び、知的関心に耐え得る教材だと言える。またトウエインの短編では明示されていないが、その名前と彼が用いる語彙・文法からジムが黒人であることが窺われる。作品の創作時、アメリカ南部諸州では「ジム・クロウ法」という黒人に対する社会的・政治的差別を規定する法律が制定されていた。また『ハックルベリー・フィンの冒険』の逃亡奴隷の名前もジムである。そうなるカリフォルニア金鉱の廃墟にひとり残されたジムとは一体何者なのか、彼の話伝える語り手は一体誰なのか、黒人英語を笑いの種にする文化的背景はどのようなものなのか、そうした問題意識も深い学びを促すだろう。

筆者が「アメリカ文学の精読」というテーマで教員免許更新講習を担当した際に、高校の先生方から「普段、生徒指導に追われているので英語精読の機会を楽しみにしている」、「文学作品を授業に取り入れるヒントを知りたい」などの声を寄せて頂いた。本稿は文法から文学作品のコンテクストを読み解く試みを行ったが、今後も文法の学習は無機質なものではなく、広い文学の世界、文化理解に繋がるものであることを伝えていきたい。

#### 参考文献

- Hawthorn, Jeremy. *A Concise Glossary of Contemporary Literary Theory*. Arnold, 1998.
- Hemingway, Ernest. *Men Without Women*. Scribner, 1997.
- Twain, Mark. *A Tramp Abroad*. Dover, 2003.
- Twain, Mark. *How to Tell a Story: And Other Essays*. Scholar's Choice, 2015.
- Wonham, Henry B. "In the Name of Wonder: The Emergence of Tall Narrative in American Writing." *American Quarterly* 41 (1989): 284-307.
- トウエイン、マーク『マーク・トウエーン短篇全集 第2巻』西崎一郎訳 出版協同社 1976年
- ヘミングウェイ、アーネスト『ヘミングウェイ全短編1』高見浩訳 新潮文庫 1995年